

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	ゴイ ホーチン
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員 兼	総合政策学部教授 國領 二郎
	副 査	慶應義塾大学 名誉教授	花田 光世
	副 査	政策・メディア研究科委員 兼	総合政策学部教授 飯盛 義徳
	副 査	政策・メディア研究科委員 兼	環境情報学部准教授 秋山 美紀
学力確認担当者：			
<p>ゴイ ホーチン君の学位請求論文は「Design of University-based Venture Gestation Program (UVGP) for student venture」と題し、八章より構成される。</p> <p>本研究は学生によりベンチャーが構想された後、法人化にいたる前の「懐胎」期において、どのような困難に遭遇するかを分析し、それらの支援をするためのプログラムの概念モデルを構築し、実際にプログラムを実施して、その効果を検証した経営学における「Design Science」の手法を用いた研究である。</p> <p>より具体的にはまず、ゴイ君自身が実施に加わった2012年と2013年のSchool on Internet (SOI)プロジェクト内ビジネスプランコンテストに参加した各年50を超えるチームの中から観察対象を特定するところから始まった。すなわち、両年に優勝した二チームが同じ大学に在学する学生によって結成され、ともに医療用機器の開発をテーマとしつつ、実施体制や意欲の面で企業支援の専門家から高い評価を受けていたにも関わらず、一方が事業化に進み、他方が事業中止に至ったことが着目された。この二つについて深い比較分析を行ったところ、共通した三つの課題に直面しながら、それらへの対応が異なっていたことが成否を大きくわけたことが認識された。三つの課題とは(1)instability of founding team チームメンバーがコミットせず辞めていく現象、(2) inadequate competencies 事業化推進にあたって必要な能力が得られない現象、と(3)failure of access to gestation environment 必要な資源の外部からの調達能力不足現象、である。その上で、それらの要因を起業やイノベーションにかかわる文献研究を通じて理論的に分析が行われた。三つの課題がいずれも、事業展開の経過の中で変化に対する対応が重要な要素であったことから、dynamic capability 理論が理論的支柱として選ばれた。この結果として(a)termed tenure, (b) competency compatibility, (c) entrepreneurial bricolage の三要素からなる、課題解決のモデルが構築された。このモデルをベースに、次はベンチャー支援者の視点から、「University-based Venture Gestation Program (UVGP)」と名付けた懐胎期ベンチャー支援プログラムが開発された。このプログラムが2014年に優勝したチーム（偶然同じ大学からのチームで医療機器開発を目指すものだった）に適用され、プログラムが成果をあげたか否かについて約1年間経過観察が行われた。結果、UVGPがベンチャーに課題の発生を事前に察知し、備えることを促すことで、課題の顕在化を防ぐ効果があることが確認された。</p> <p>各章の概要は下記の通りである。</p> <p>第一章では、この論文の学問的位置づけが行われた。ベンチャー経営論について文献レビューのうちに、特に法人化前の懐胎期における数少ない文献の紹介、そしてさらに少ない学生ベンチャーについての検討が行われた。さらに、本論文における観察対象(SOI-Asia ビジネスプランコンテスト参加者)に対して適用する懐胎期学生ベンチャーの「成功」度合の判断基準のあり方が論じられ、「製品のプロトタイプが完成したこと」などの明示的な指標群が提示された。</p> <p>第二章では、この論文が採用したDesign Scienceの方法論について論じられた。システム（技術だけでなく、制度や教育を含む）を実装しながら、その評価を理論的に行うために、(1)解決すべき課題の特定、(2)解決方法の設計に向けた理論的検討、(3)課題解決プロセスの概念モデル構築、(4)具体的な問題解決方法の設計、(5)実施と評価、の5段階を実施しようというものである。この方法論の</p>			

論文審査の要旨及び担当者

No.2

紹介の後に、ベンチャー支援のために、この方法論をどのように活用すればいいかが論じられた。

第三章では上記 Design Science 方法論の第一ステージである、解決すべき課題の特定について記述された。まず 2012 年と 2013 年の Soi-Asia ビジネスプランコンテストがアジア 6 大学から各年 50 以上の提案を受けて行われたことなどが紹介された。そして、ベンチャー支援の専門家からなる審査チームによって水準の高さ、事業化に向けた本気度などから優勝チームが選定されたことが報告されている。結果的に兩年とも優勝チームは同一大学（インドネシアのブラビジャヤ大学）をベースとしたものだった。分野的にも医療関連機器という似たテーマを対象としていた。このように多くの面で類似しながら、一方は事業化に向けて進み、他方は途中で頓挫した。すなわち、この二つの事例を深く検討することで、多くの要因をコントロールしながら、ベンチャー成否の要因が特定する機会が得られた。分析の結果として、(1)instability of founding team, (2) inadequate competencies, と (3) failure of access to gestation environment の三つの課題への対応が二つのベンチャーの成否を分けることが分かった。よって本研究では、これら三つの課題が解決すべき問題として特定された。

第四章では、過去になされた研究のレビューが行われた。まずはベンチャー研究の全体の中で、この研究が取り扱っている対象の位置づけが行われた。次に、第三章で特定された三つの課題について、それぞれの課題についての過去研究の系譜が整理された後に、三課題に共通した変化に対する対応能力についての理論的検討がなされた。

第五章では、課題を解決しながらベンチャーが次の段階に向かう概念モデルが提示された。ほぼ課題領域に沿って、(a) termed tenure, (b) competency compatibility, (c) entrepreneurial bricolage からなっており、ゴイ君はこれを Venture Gestation Model (VGM) と名付けた。

第六章では、ベンチャー支援サイドの視点から、課題解決に向けた能力涵養に向けた教育プログラムの設計が行われた。懐胎初期段階のチームに対して、課題の存在について啓蒙した上で、課題発生を未然に防ぐ計画策定、課題解決能力の自己評価不足部分に対する対策などを促すものである。ゴイ君はこのプログラムを University-based Venture Gestation Program (UVGP) と名付けた。

第七章では、2014 年のビジネスプランコンテスト参加者（この年はやや少なく 29 チーム）に対して、適用した UVGP の経過の説明と、優勝チームに対して継続した UVGP 適用の評価を行ったプロセスが報告された。優勝チームは再度同じ大学からのものであり、分野も同じ医療機器の製品化であり、評価の対象として好都合であった。同チームは 2015 年末にはインドネシア助産師協会に機器のプレゼンテーションをさせてもらえる段階、すなわち本研究における「成功」域に達した「成功事例」である。このチームの成功に至った進捗を詳細にモニタリングし、三つの課題に対してどのように対応したかについて詳細な記述がなされた。

第八章においては、本研究の結論とのベンチャー支援研究における意義と、限界が語られた。UVGP が 2014 年優勝チームにとって「問題を事前に察知し、備えることで顕在化を防ぐ」ことには有効であることを確認したとした一方で、状況の変化に合わせながら、顕在化してしまった問題を解決する能力の開発まではできていなかったと報告した。すなわち UVGP の有効性の主張とともに、現段階では不足している点について自ら指摘し、その対応策について論じた。本研究の理論的な貢献の位置づけについても自己評価が行われた。

本研究は思い付きをあまり超えないものから、研究室での長年の訓練を受け十分な検討を経てチームが結成されたものまで、熟成度に大きなばらつきがある懐胎期学生ベンチャーについて、多くの懐胎期学生ベンチャーを 4 年間にわたって経年観察をするという膨大な手間をかけながら実施された労作といえる。単に観察するだけでなく、自らがコンテストの運営や応募ベンチャーに対する教育、さらには優勝チームに対する事業化に向けた支援などする中から、得たデータを理論的に検討した。実態の把握の困難さから類似の研究はほとんどなく、この研究の希少的価値は高い。よって、ベン

論文審査の要旨及び担当者

No.3

チャー研究に重要な貢献を行ったといえる。また、主体的に課題解決に取り組みながら、そこから得られた知見を客観性と一般性ある知に昇華させていった、SFCらしい研究ともいえ、高く評価できる。

限界もある。最大の問題は、抽出された課題の網羅性の欠如であろう。成否をわけた二事例のコントロールされた比較から抽出された三課題、という課題抽出方法は、論理的な厳格性という意味では、適正と認められるが、それらが懐胎期ベンチャーの直面しうる課題の全てとはいえない。コントロールされた要因（チームを取り巻く環境、受けてきた教育など）の中に、大きな影響を与えうる他の要因が潜んでいる可能性は高い。この問題は成否要因の厳格な判定を行う要請とトレードオフの関係にあるものなので、ただちに解決策があるものではないが、今後、類似の研究を積み重ねていきながら、他の要因の特定や、それらに対する解決方法の設計の研究が望まれるところである。それがなされるまでは UVGP は発生しうる一部の問題に対する解決策、という位置づけにとどまるだろう。

いま一つの限界である、評価の主観性については、審査委員会から繰り返し指摘を受けつつ、懐胎期学生ベンチャーの進捗について客観的メルクマールを設定しながら評価を行ってきたので、相当程度客観性のあるものとなったと思われる。しかし、UVGP の効果の判定を一部、当事者の証言に頼るなど、主観性は完全に排除できていない。また、主観性排除のために設定したメルクマールがハードウェア開発に偏ったものとなっていて、汎用性は高くないと思われる。ただし、本研究の範囲の中では適切に機能したものと判定できる。

これらの限界を認識しつつも、本研究は著者本人だけでなく、経営学研究に新たな発展の可能性を与えたものと評価できる。よって、本論文は著者が研究者として自立した研究活動を遂行するために必要な研究能力と学識を有することを示したものといえ、本学位審査委員会はゴイ ホーチン君が博士（政策・メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。